

市民的不服従と現代 II

三里塚の今を生きる

2015年2月8日

企画趣旨説明

道場親信 所員／現代人間学部准教授

1 — 「市民的不服従と現代」について

（「共生」——問われる日本社会」と同じにつき、省略）

2 — 三里塚の今を生きる

日本の成田空港建設をめぐるのは、農地と村を守ろうとする農民と国家とが激しく対立をし、多数の犠牲者が生み出されました。本日は、(1)数十年もの歳月にわたるこの農民たちの抵抗を今日の視点からふりかえるドキュメンタリー『三里塚に生きる』を上映し、(2)代島監督とともに映画が映し出す三里塚のいまについて考えたいと思います。

遡れば1966年、政府は地域住民に相談のないまま、新東京国際空港を千葉県内陸部の三里塚に建設することを決定しました。その後、三里塚農民は、家族ぐるみ、村ぐるみで強引な空港建設に抵抗することになります。成田空港は1978年には滑走路1本で「暫定開港」をしますが、二期工事をめぐって長期の膠着状態に入ります。そして1991～94年の政府、地元自治体、農民による公開のシンポジウム、そして円卓会議における話し合いを経て、運輸大臣の公式謝罪に至りました。多くの反対派農家はその後移転を受け入れ、「成田問題」は次第に忘却の淵に沈んでいったかのようでありました。

かつて60年代に小川プロダクションのカメラマンとしてこの闘争の初期の記録を撮影した大津幸四郎さんが、監督として40年後の三里塚に生きる人びとにカメラを向けました。代島治彦さんは大津氏の志に触れながら、もう一人の監督

として映像の編集とプロデュースに携わりました。

「国策」に逆らった農民たち、見て見ぬふりをする
ことができずに駆けつけた支援者たち。ここには「市民的
不服従」のひとつの姿を見ることができます。国家の謝
罪がなされて20年、いま三里塚で生きるとはどういう
ことなのか？ 日本社会は変わったのか？ 闘争の中で
生きてきた人たちの生きざま、そして40年後に再び三
里塚に入った大津監督の生きざまを記録した映画とデ
ィスカッションを通じて、日本社会における「市民的不服
従」の今日的意味を考えたいと思います。

本日、第1部では、大津幸四郎・代島治彦監督による2014年のドキュメンタ
リー『三里塚に生きる』を上映いたします。140分の映画上映のあと、休憩をは
さみまして、第2部では代島監督からこの作品についてお話をうかがい、次いで
監督とリケットさんで対談をしていただくという流れになっております。まずは
映画『三里塚に生きる』をご覧になっていただきたいと思います。



映画『三里塚に生きる』より ©三里塚に生きる製作委員会

「三里塚闘争」のあらましと映画『三里塚に生きる』

道場親信 所員／現代人間学部准教授

ドキュメンタリー映画『三里塚に生きる』の背景となる「三里塚闘争」、つまり成田空港反対運動がどのようなものであったか、ごく簡潔にふりかえった上で、映画のあらましについてまとめておく。

三里塚闘争は、高度経済成長が本格化した1960年代に、航空需要の増加を見越して首都圏に第二国際空港を政府が計画したことが発端となっている。当初、茨城県霞ケ浦、千葉県浦安沖、木更津沖などが検討されたが、政府与党の有力政治家の利権争いなどもあって決まらず、1963年になって千葉県富里村・八街町（現在はともに市）にまたがる滑走路5本の大型空港案が提示された。1500戸が立ち退くというこの計画に地元では激しい反対運動が起こり、県知事も同意しなかったことから政府はこの案を断念し、66年6月に急遽浮上したのが三里塚案であった。

三里塚案は富里・八街案を半分以下に縮小し、滑走路3本に減らした「暫定空港」案であった。用地は国有地と県有地で約3分の1を転用でき、残りの敷地は大正期から戦後期にかけてこの地に入植した開拓農家が大半を占めているため、地域への定着度の低い開拓農家であれば立ち退きに応じるだろうという政府側の目論見もあった。空港の形は周辺に広がる古い農村（古村）を避けてデザインされている。建設を急いだ政府は提案の直後に閣議決定をし、建設主体である新東京国際空港公団をすぐに設立したほか、早い段階から強制収用をちらつかせるなど力で押す建設の姿勢が際立っていた。

地元ではこれに対して空港反対同盟を結成、測量の阻止や土地の強制収用（代執行＝建設主体である空港公団職員の手では無理な作業を警察官の武力で強制的に実行すること）に反対し、やがて開港を阻む闘いに乗り出していった。

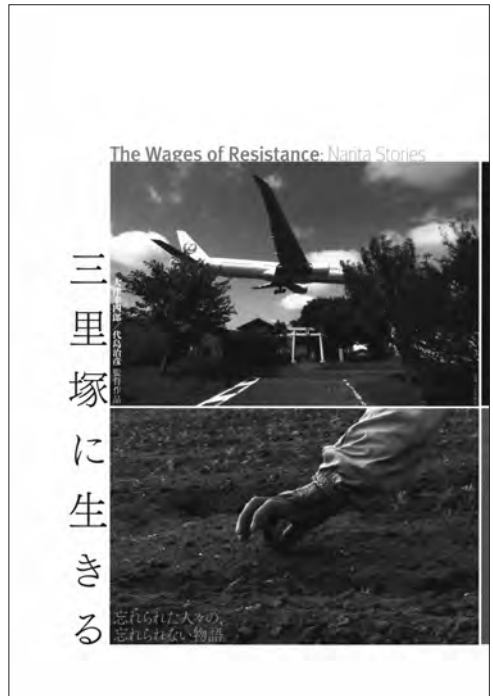
1971年春、重要地点の強制収用に乗り出した政府側は、数千員の機動隊員を投入して、収用地点にバリケードを作って立てこもった反対同盟員を排除、数日間の激突によって多数の負傷者を出した。半年後の9月、二度目の強制収用に乗り出した政府側と反対同盟の間で激しい衝突があり、警察官3名が命を落とす事態となった（東峰事件）。警察側は村の青年たちを逮捕し、村には暗い空気が立ちこめるようになった。10月に青年行動隊の1人であった三ノ宮文男さんが自ら命を絶った。映画『三里塚に生きる』に登場する秋葉清春さん、柳川秀夫さん、石毛博道さんはこのとき罪に問われた一員である。裁判は長期にわたったが、被告はいずれも殺人に関わっていないことが裁判で確定した。

9月の強制代執行では、大木（小泉）よねさんというおばあさんの家が唯一宅地として強制収用され、彼女が長年住んだ家が破壊されて無一物で放り出される結果となった（映画に登場する小泉英政さんは、このよねさんの養子となって三里塚に生活を続けている精農家である）。憎しみは憎しみを呼び、闘争はエスカレートした。反対運動側の火炎瓶の使用や「ゲリラ」の名による個人襲撃、放火などが続く一方、警察側も反対運動支援者への暴力、リンチ、住民の監視、検問などのいやがらせが続いた。

1977年5月、反対同盟の集会で怪我人の世話をしていた支援者が機動隊員の放った催涙弾を頭部に受けて死亡、翌78年3月には支援団体の空港突入部隊により管制塔を占拠、機材の破壊が行なわれ、開港は2か月延期となった。

この間、反対同盟の中で、末永く闘いを続けるために農業のあり方を見直すという動きがあり、有機農業に取り組むグループが誕生した。有機農業の動きは反対同盟内外の人びとを巻き込んで産直の運動となり、いまもいくつかのグループが活動を続けている。映画に登場する堀越昭平さん、元青年行動隊リーダーの島寛征さん、柳川さん、小泉さんはそれぞれグループは違うが有機農業を協力しながら続けている。

1980年代になると、空港の2期工事（第2ターミナルとB滑走路の建設）が始まるが、滑走路用地に反対派が健在であるため、工事は進まなかった。90年代に入ると、長期にわたって地域を強制収用の脅威の下に置いている国側に強制収用を断念させるための問題提起が反対同盟側からなされるようになった。91年から93年にかけて反対同盟熱田派（反対同盟は83年に熱田派と北原派に分裂、87年に北原派が同派と小川派に分裂して同盟は3つになっていたが、最大多数派が熱田派であった）と国・空港公団の間で空港建設過程を検証する「成田空港問題シンポジウム」が開かれ、国側は誤りを認めて謝罪をした上、強制収用を放棄した。こうした国側の対応により、移転を受け入れる反対派農家が増



映画『三里塚に生きる』大津幸四郎・代島治彦監督、140分、2014年、パンフレット表紙。

え、用地内の中央にある「木ノ根」集落、B滑走路予定地の中央にある「天神峰」集落、予定地外の騒音地区となり、反対運動では最も運動の強かった「辺田」地区の移転が行なわれた（すべての住民が移転したわけではない）。映画に登場する椿たかさん、萩原勇一さん、三ノ宮静枝さんはこうして「辺田」から移転した農家の人びとである（静枝さんは自死した文男さんのお母さんである）。

こうして反対派農家は90年代以降大きく減ったが、いまでも反対運動を続けている人たちがいる。映画に登場した山崎宏さんは支援セクトの現地常駐者として20数年三里塚に住み続けている。柳川秀夫さんは反対同盟熱田派の世話人としていまでも有機農業と反対運動を続けている。小泉英政さんは反対運動には関わらないのをやめたが、いまでも用地内で生活し、有機農業を続けている。

三里塚闘争に関しては、闘争の初期から映像記録集団「小川プロダクション」が住み込みでドキュメンタリー映画を作り続けていた。1969年に製作された最初の作品が『日本解放戦線 三里塚の夏』であり、『日本解放戦線 三里塚』（70年）、『三里塚 第三次強制測量阻止闘争』（70年）、『三里塚 第二砦の人々』（71年）、『三里塚 岩山に鉄塔ができた』（72年）、『三里塚 辺田部落』（73年）、『三里塚 五月の空・里の通り路』（77年）とシリーズ作品を製作している。大津幸四郎カメラマンは、このうち最初の「夏」の撮影に関わった。先にふれた椿、萩原、三ノ宮の各氏は三里塚シリーズにはしばしば登場する人物であった。

『三里塚に生きる』はこのような背景からいまでも三里塚に生きる人びとのくらしと考えを記録した映画である。支援者山崎宏さんの人生、移転した人びとの思い、闘争が何であったかについてのふりかえり、東峰事件とその後の三ノ宮さんの自死をめぐる元青年行動隊員の回想、有機農業についての思い、小泉よねさんへの思い、それぞれの立場から自分がどのようにして生きてきたか、いまどういう思いで生きているのかが語り出される。

第2部◎

ディスカッション

道場：それでは第2部のディスカッションに移りたいと思います。まず代島監督^{だいしま}から、この作品を作るに至った経緯や作品についての思いについてお話しいただけますでしょうか。

—— 作品に込めたもの

代島：監督の1人の代島と申します。本日は、こんなたくさんの方々に作品をご覧いただきまして、たいへん嬉しいです。つくった僕たちとしては三里塚のことをよく知っている方々、それから、この映画に登場して下さった皆さん、そういう方々にこの映画がどのように受け止められるかということが一番心配でした。

当然、三里塚の闘いの長い時間と複雑な人間関係をぜんぶ映画の中に盛り込むことは無理なんです、僕たちが発見し、出会った今の三里塚を描きました。リケットさんはこの映画の試写会に来て下さり、これは今つくられるべき映画だ、今だからつくれたんじゃないかと言ってくださいました。

カメラマンでこの映画の監督でもある大津幸四郎さんと僕と、2人で2012年の8月に三里塚に入りました。大津さんの最初の思いとしては、1967年秋から

登壇者プロフィール

—— 代島治彦（だいしま・はるひこ）

1958年生まれ。博報堂に勤務した後、雑誌編集者、放送作家、広告プランナー等を経て、記録映画『老人と海』の上映を手掛ける。1992年、オムニバス映画『バイナッブル・ツアーズ』（真喜屋力／中江裕司／當間早志監督）の製作と配給を担当。1993年、山形国際ドキュメンタリー映画祭特別イベント「世界先住民映画祭」をプロデュース。翌1994年には映画館「BOX 東中野」を立ち上げ、2003年3月まで精力的な企画上映活動を展開した。現在、スコブル工房代表。

—— ロバート・リケット（Robert Ricketts）

1944年アメリカ生まれ。カナダ・ケベック州のモントリオール大学の民族学研究科博士課程満期退学（1983年）。1980年、成田国際空港を研究テーマに来日、10年間、三里塚と付き合う。1992年、和光大学着任。専攻は社会人類学、多文化社会論。「対談による解説」（道場親信さんとともに）「壊死する風景——三里塚農民の生のことば」増補版（創土社、2006）。

—— 道場親信（みちば・ちかのぶ）

1967年生まれ。早稲田大学大学院博士課程満期退学。早稲田大学文学部助手、各大学非常勤講師、予備校小論文添削者などを経て和光大学着任。戦後日本の社会運動史を研究。「成田空港問題円卓会議」以降設置された成田問題の歴史記録プロジェクトの調査研究を11年つとめ、小川プロの遺した資料の整理・保全に関わった。著作として『占領と平和』（青土社、2005年）、『抵抗の同時代史』（人文書院、2008年）ほか。

68年夏にかけて撮影した『日本解放戦線 三里塚の夏』の登場人物たちは今どうしてるだろう、あのおっ母は元気なんだろうか、青年行動隊の若者たちはどんなふうになんて人生を送ってきたのだろうか、ということがあり、現地に入りました。

ところが、この映画に登場して下さった柳川秀夫さんをはじめ、皆さんやっぱり口が重くて、もう終わったことだ、今さらしゃべって何が変わるのか、俺は昔のことはしゃべらないという人がほとんどでした。

島寛征さんは大津さんとの関係も深かったものですからとても暖かく我々を迎えてくれましたけれども、いざ撮影しようとする、予定が入ったとか、仕事が忙しいとかのりくりとして、半年ぐらいはカメラの前でしゃべるということをしてくれませんでした。

そんな中で、大津さんと僕は撮り始めたんです。我々は、何と言ったらいいのか……闘いの傷というか、それが「かさぶた」で覆われている、その覆われている表層を眺めるしかないという感じでした。そのかさぶたを無理に引きはがして、過去にどんな血が流れたのかを語ってもらうとか、それをカメラで撮らせてほしいとか、そういうことは絶対にお願ひできないと考えました。そしてむしろ撮れないということ、しゃべらないということ、どう映画にできるのかということからこの映画をつくるのが始まったんですね。

そのかさぶたを上から見つめたり、どんなふうにならなうかこの傷は、と考へたりしました。この傷の向こう側でどくどくと何か流れているものがあることは聞こえてくるんです。そういうことに触れながら、だんだん皆さんと親しくなっていくうちに、実は皆さんの心のどん底には残念がっている部分があるんだということがわかってきました。

というのは、闘いの記憶がマイナスのイメージで歴史に刻まれていく、あるいは忘れ去られていく——そういうことを残念がっている部分がある。本当は自分の心情を後世に残したいんだけど、今さら残してもしょうがない、まともに聞いてくれる人もいないだろう、そういう感じなんだというのがわかってきました。

ところが、現地で撮影しているうちに大津幸四郎さんが肺に病を得てしましまして、なかなか撮影が思うようにならなくなりました。大津さんは主治医からすぐ入院するように言われていたんです。が、そのころ我々は現地にアパートを借りて住みこみました。もう本当にしんどそうな大津さんがカメラを構えて、僕も一緒に行って、話を聞くんですね。インタビューというよりは、何となく話をはじめて、そのうちにたとえば三ノ宮静枝さんから文男さんの亡くなったときの話が出てくる、という感じです。カメラもずっと構えているというよりは、話しているうちに大津さんが「ここだ！」と思ったときに回し始めるという撮り方でした。まったく2人だけの現場でしたが、闘いがある意味で終わり——いまも1人で闘っている人もいますが——、いまの三里塚に生きている人たちが何を考へていて、どんな人生を送ってきたのかということの思いながら、もう一度白紙か

ら発見していく旅の記録みたいなものになりました。

三里塚の闘争というのは、小川紳介さんが撮った7本の三里塚のシリーズとか、小川プロで助監督をやっていた福田克彦さんの残した記録映像のイメージが強いと思うんですが、ある意味でその定型化されたイメージの呪縛を解いた映画だというふうに言ってくれる映画評論家もおられました。

大津さんは去年の10月上旬に入院されて、11月28日に亡くなるんですけども、お見舞いに行ったときに「やっと人間が撮れた」とぼそっとおっしゃったんです。小川紳介さんと一緒に『日本解放戦線 ディスカッション』を撮り、そこで小川さんと袂を分かって、大津さんは土本さんと水俣を撮り始めるわけですが、そのときに大津さんは三里塚を離れるのが悔しかった、後ろめたい気がした——ずっと人々のことが気になっていたんですね。こんど一緒に撮りながら、小川さんとつくった『ディスカッション』は「映画としては面白いけれども、やはり闘いの映画になってしまった」と言っていました。「自分はもっと農民たちの生きざま、あるいは心情というものにカメラを向けたつもりだったけれども、小川さんは国家権力対農民の闘いの映画にってしまった、もっと人間が描かれるべきだった」というのが大津さんの意見でした。つまり大津さんは人間を撮りたかったんだと思うんです。そういう意味で、大津さんは45年ぶりに三里塚を訪ねて、「やっと人間が撮れた」と言ったんだと思います。

大津さんが亡くなった後、上映活動する中で僕が考えたことですが、土本典昭と大津幸四郎は水俣をずっと撮ってきて、二人はとても気が合って、人間



シンポジウム当日、120人を超える参加者を得て会場は熱気で溢れた。
(登壇者：左から、道場、代島、リケット、手話の高島さん)

をどう撮るかということを追求してきたのですが、それに対して小川さんは面白い映画をつくりたいという映画青年なんですね。インタレスティングでいくんですよ。大津さんと土本さんの水俣のつくり方はコンパッションなんです。苦しんでる人、悩んでる人に、どう共感し、思いやっていくかという映画だと思います。

大津さんは、今度の映画では、いま生きている長い人生を闘いに費やした三里塚の人たちに対するコンパッションで、どう撮れるかという映画を撮りたかったんだと思いました。闘いの全貌を明らかにするとか、歴史を紐解くとかいう映画ではなくて、人間が生きるというのはこういうことだという映画なのです。

道場：ありがとうございました。では、今日の上映会のきっかけも含めてリケットさんの方から、『三里塚を生きる』をどういうふうに見られたのかということや、三里塚へのご自身の関わりなども含めてお話しください。

—— 三里塚との関わり

リケット：僕は学生時代に日本に3回ぐらい来ています。3回目は1980年でしたが、その目的は、成田（三里塚）空港建設の反対運動を研究するためだったんです。ご存知のように、三里塚闘争は、政府が1966年7月の内閣決定で、「新東京国際空港」の建設計画を発表して、その敷地として千葉県成田市三里塚地区を指定したことが発端です。というのは、政府が地域住民との事前相談なく、その後も地元の意見と理解を求めようとしなかったからです。多くの農民は即座に「三里塚・芝山連合空港反対同盟」を結成しました。

当時、政府の姿勢は次の対談からうかがえるでしょう。長年、三里塚を応援してきた物理学者の山口幸夫さんによると、1966年7月3日の夕方、閣議決定の直前に農業次官は運輸次官に新空港案について三里塚農民の理解をえたかと尋ねたところで、運輸次官はこう答えたそうです。「運輸省が飛行場をつくるときには上の方で一方向的に決めて、農民はそれに従うのが一般原則である。これまでもこの方式で飛行場を建設してきたのであって、一度も問題になったことはない。」¹⁾

公正な手続きをぶっ飛ばした政府は、1967、68年から機動隊を導入し、緊急体制で空港建設を強権的に進めていったのです。政府・空港公団の不手際と横暴さに対して反対同盟は、家族と村と生業を守るために不服従を宣言して、全国に影響を及ぼすほどの支援体制を整えました。しかし、71年の2月と9月に千葉県は国の代わりに第一次と第二次の土地強制収用（いわゆる代執行）を実施しました。あわせて、25,000人も警察官と機動隊が動員され、それに対して、20,000人の農民と支援者は土地を守ろうとしました。対象地は、反対同盟の「共有地」の6カ所でした。

1) 山口幸夫「三里塚と脱原発運動」高草木光一・編『一九六〇年代～未来へつづく思想』岩波書店、2011年、p. 235。

2月の第一次代執行は1ヵ月間にわたりましたが、農民たちは家族ぐるみで断固とした非暴力的抵抗を見せました。反対同盟の婦人たち（婦人行動隊）は自らの身体を木などに鎖で縛ったり、青年たち（青年行動隊）は砦をつくったり地下壕を掘ってひそんだりして、子どもたち（少年行動隊）も学校を休んで加わりました。しかし、第二次代執行は、9月16日に三里塚の東峰^{とうほう}十字路近辺で農民・支援者と警察権力との間に激烈な衝突が生じて、機動隊員3名が死亡し、農家のおばあさん1人が暴力的に立ち退かされ、1人の若い農民が自死するという悲惨な状態に終わりました。

僕が三里塚を訪れた1980年には、反対運動の出発からもう14年の歳月が流れていました。その2年前の78年に成田新国際空港公団は、地元農民の反対を押し切って、A滑走路の一本だけを完成してむりやり暫定開港を宣言しました。

僕は、三里塚を対象として外から「研究」するのではなくて、反対運動の中に自分の身をおいて、それで何が見えてくるのかという研究方法を選びました。当時、三里塚の「現地」は絶えず機動隊、警察官、私服警官に包囲されており、支援者の出入りの際に検問にあたり厳しく取り締まられたりすることがたびたびありました。その中に生きている農家の人たちの日頃の暮しと日常思想に根づいた、国策に逆らう抵抗の原動力を理解したいと思ったのです。

そのために、1980～85年に東京でアルバイトをしながら、週に数日間三里塚へ行き来していました。83年に三里塚の友人（ドキュメンタリー作家の福田克彦さん）の斡旋でアパートを借りて、3年間そこに住みつきました。和光に着任した92年まで、何とか三里塚に定期的に通い続けました。アパートを最終的に引き払ったのは2012年でしたが、研究活動は実質的に80年代後半に中止となりました。

実は、きょうの上映会の準備として、1週間前に、和光大学の小関和弘さんと道場さんの企画で津さんが撮った『日本解放戦線 三里塚の夏』²⁾を見ました。『三里塚の夏』は1968年製作で、小川プロが三里塚に関わった最初の大きな作品です。当時は青年行動隊、つまり村の青年たちの集団、「親同盟」——その親父たち——それから婦人行動隊とか、少年行動隊など、村の独特な組織がつくられていました。僕は、島寛征さんなど、青年行動隊の数名以外に映画に出てくる人物の半分も知らなかったです。1980年代におつき合いのあった青年行動隊メンバーの多くは1968年にはまだ若くて映画に出ていません。あるいは出てもマイナーな場面です。登場する親同盟の多くも、逆に80年代になると、萩原勇一さんなどはもう表に出なくなっていて、僕はお名前だけを知っていました。

三里塚には歴史的に3種類の村があります。その構造は反対運動に大きな影響を与えました。まずは芝山町の徳川期新田の「古村」です。二つ目は、明治・大

2) 鈴木一誌・編『小川プロダクション「三里塚の夏」を観る』太田出版、2012年、参照。

正期に入ってから、国が当時原野だった北総台地の一区画を払い下げて、開拓した「明治開墾部落」(芝山町)です。三つ目は、戦時中に米軍の大空襲で焼け出された者や引き揚げ者、周りの農村の次三男などが国と県から払下げられた土地を開拓して、第二次世界大戦直後にできた三里塚の「戦後開拓部落」と言われる集落です。

「古村」と「明治開墾部落」は、空港反対同盟の中軸をなしましたが、「戦後開拓部落」では、営農の確立がうまくいかず、貧しい生活をしてきた農家が多く、国からは抵抗ができないだろうと見なされていました。政府は1966年、地元の反発を極小化するためにわざわざ「戦後開拓部落」に狙いを付け、新空港の中心部をそこにおくことにしました。結局、「古村」と「明治開墾部落」は騒音地区内に、「戦後開拓部落」は空港予定地内という構図になり、予定地内外の区分は反対運動の力学に大きく影響しました。

1968年は新左翼の支援者たちが三里塚に入ったばかりのときでした。小川プロはその2年前に『圧殺の森 高崎経済大学闘争の記録』や『現認報告書 羽田闘争の記録』という作品をつくる中で新左翼のグループと関わりをもって仕事をやりはじめたので、その関係から三里塚にも関心を持ったようです。そのため、映画には新左翼の学生たちも登場してきます。農民は3つの条件で、学生運動と共闘関係を結んだのです。①農民の主導権を尊重すること、②セクトの間に内ゲバをしないこと、③行動をとる前に農民と相談すること、がそれでした。

『三里塚の夏』では、カメラは敷地内外の農家たち——そこに住んでいる青年たちとその親父、おっ母たちも丁寧にかつダイナミックに追っていて、「古村」「明治開墾」「戦後開拓」という村落が一つのまとまった地域というイメージが活き活きと伝わってきます。

それに対して、大津さん、代島さんの新作品『三里塚に生きる』では、三里塚の状況は大きく変わっています。例えば、新作品に出てくる人物は、どちらかと言えば、「古村」の者ですね。ほとんどは芝山町菱田地区の^{ひだ}辺田部落からです。例外的に、柳川秀夫さんは「明治開墾」、三里塚地区の島寛征さんは沖縄出身の「戦後開拓」グループの一人で、「古村」出身ではありません。また、『三里塚の夏』のころと比べれば、出てくる人間も場所も限られてきます。三里塚闘争の一番暗い、痛い部分、機動隊員と青年行動隊の一人の死について、よくも農家の信頼を得て、そこまで入って撮れたなと感動しています。監督のお話をうかがうと、それは狙ったものではなかったようですが、どうだったんでしょうか。

代島：はい、何が聞けるかわからなかったですね。

リケット：僕が三里塚に集中的に出入りしたのは、1980年から86年ぐらいで、農民にも支援者にも出会って、ざっくばらんにうかがえましたが、東峰十字路の事件だけは立ち入り禁止の領域でした。要するに、僕も直接に聞けなかったんです。

1971年前半までは三里塚農民が非暴力的手段を選んで抵抗したんですが、第

二次の代執行（強制収用）の実施は、反対同盟の主力だった青年行動隊を窮地に追い込んで、国家の暴力との決戦になりました。機動隊員3名の死は予想外ではないかと思いますが、ともかく、東峰事件は反対運動の大きな節目になりました。それまでは、公権力の乱用は北総大地の広大な農村地帯の怒りを買って、三里塚・芝山農民が地域社会から手厚い応援を受けていました。島寛征さんのお父さんは、代執行を「北総台地の内乱」という言葉でその現状を表わしたぐらいです。

しかし、事件の後、周りの農村の支持が激減し、「地域ぐるみ」闘争の性格が色あせました。『三里塚に生きる』にあるように警察、機動隊は、証拠がないのに、くり返し強制捜査を入れたり、村の青年たちをかき集めて逮捕・拘置もしました。三里塚と芝山の農村には実質的な戒厳令が敷かれて、周りの地域から分断され孤立させられました。一般支援者のなかにもヒビが入り、しばらくの間、その人数も減っていきました。そうした中で、東峰十字路事件の2週間後の10月1日に辺田部落の青年行動隊のリーダー、三ノ宮文男さん（22歳）は部落の神社で自らの命を絶ちました。彼は遺書でこう記しました。

空港をこの地にもってきた者にくむ。[中略] 本当に国家権力というものは恐ろしいな、生きようとする百姓の生をとりあげ、たたきつぶすのだからな。

反対同盟、とりわけ青年行動隊は深い悲しみに包まれました。

—— 初めて農民自身が語った

リケット：東峰十字路の直後の時代についての資料を読んでも、公的な証言がないし、「関わった」と検察官に言われて起訴された55名（青年行動隊30名）もしゃべれないんです。もちろん裁判の関係では、被告側が何度も逮捕され取り調べられて、高圧的に作られる自白調書に印を押させられるのですけれども、結局、何がなんだかよくわからないんですね。その自白調書自体は、検察側が一方的にストーリーを作ったもので、矛盾だらけでした。福田克彦さんは『三里塚アンドソイル』（平原社、2001年）でそのプロセスを分析しています。例えば、農家の青年に対して、なかった事実を、「お前の隣の家の誰々がそうだって言ってるぞ」と検察官が言うと、青年は自分も隣同士と合わせておこうとして認めてしまう。調書には、そのような農村的な論理が流れていると福田さんは見ていました。

東峰裁判の判決は千葉地裁から1986年10月に言い渡されましたが、自白調書は「信憑性がない」と、裁判官が判断し、被告人に対して無罪か執行猶予がついた懲役刑を命じたのです。有罪とされた被告人も、傷害致死は認定されず、凶器準備集合と公務執行妨害のみで執行猶予に終わったという裁判でした。さらに裁判官から農民が抵抗した理由は「理解できる」という大事な一言が被告人に届けられました。

『三里塚に生きる』のなかで、東峰事件について、農民自身が語るという場面は初めてのことで、その生の声は画期的でありながら、重苦しいものです。辺田の元青年行動隊の秋葉清春さんは悲惨なシーンを思い起こします。

十字路行った時にね、機動隊員が学生に殴られているのを、何て言うの、[反対派の] 救援隊という女の二人、三人が「これ以上殴ったら死んじゃうから、殴っちゃだめ」って女の子が大泣きしていたのは覚えてんの、俺。[中略] 機動隊が一名か二名亡くなったという話を聞いて、これはとんでもないことになるなっていう意識はあったよね。はじめてそういう形で警察官が死んだということ。

—— 国・空港公団との話し合い、和解

リケット：ちなみに三里塚でこの映画を上映したときには、元青年行動隊の人たちがみんな来られましたか？

代島：ほとんど来てくれましたが、柳川さんが来なかった。

リケット：そうですね。シンポジウム・円卓会議の後で立場が異なっていたということもありますね。柳川さんは今も空港反対を続けています。

東峰裁判の判決が出たのが1986年ですけれど、空港の作り方の問題と農民の苦悩が裁判官に認められ、釈放された青年行動隊の主要メンバーと（福田さんを含む）その周囲はそこから最終的な解決を求めようと動き出しました。空港反対同盟の熱田派は、1989年に記者会見を開催し、政府に対して3つの公開質問状で話し合いへの参加を呼びかけました。これに政府が乗りました。ある意味では、政府が巻き込まれたという見方もできるし、逆に政府が農民を巻き込んだと言う人もいますが——どっちもどっちかもしれません。

反対同盟は話し合いの成立に4つの条件を出しました。まずは、強制収用（土地収用法に基づく事業認定）を放棄すること。2つ目に、農民と対等の立場で話し合い、B・C滑走路の計画（いわゆる二期工事）を白紙に戻して改めて話し合うこと。3つ目、公正な（非暴力的、平和的な）議論を進めること。4つ目は国側が以上の条件を破ったら、農民側は話し合いから撤退すること。1990年1月に江藤（隆美）運輸大臣が直接返事をもって三里塚に来て、農民たちと会談しました。結局、政府は以上の条件をおおむね呑んだわけです。

これがきっかけとなって政府・空港公団と反対同盟の公開討論、つまり「成田空港問題シンポジウム」とその続きの「同円卓会議」が3年かけて1991年～94年に行なわれます。その中では、1993年5月に運輸大臣が農民の主張を完全に受け入れました。国の農民無視と強行策の失敗を全面的に認めて、平和的解決に向けて二度とこのような問題を起こさないように協力していこうという形になります。山口幸夫さんは、「日本の歴史において国家官僚が『自分たちが間違ってい

た』と謝罪するのははじめてのことではないか」と高く評価しています³⁾。

政府の考えていたことは、どうせ空港は3つの滑走路を完成できるんだから、これでもって農民を乗せることができればなおいいという方便だったでしょう。しかし農民の側では、話し合い・和解が全然違う意味を持ちました。とくに「古村」にいた人たちにとって、闘争の呪縛から農民を自由にしようという思いが強くありました。『三里塚に生きる』では、三ノ宮さんの死の重みが切に描き出されていましたが、柳川さんの言う「呪縛」としての三ノ宮さんの死を含め、さまざまな呪縛がある。これらから人びとと地域を解放したいと考えた人たちがいました。

土地の強制収用が適用可能な状態では、予定地とされたところでは空港公団以外の人に土地を売ったり、新しく買ったりすることはできません。そういうどうにもならない状態から解き放されて、闘争を続けるのか、別の道を選ぶのか、それを農民が自分の判断で決めていようにするという考え方でもありました。

もちろん、元反対同盟の農民全員が「話し合い路線」に乗ったわけではありません。すでに1983年には反対同盟が、農民の大多数を占める熱田派（熱田一代表）と北原派（北原鉦治事務局長）に分裂し⁴⁾、またその後、空港用地内の農家の間にも立場の相違が現われました。とりわけ、空港の用地内の農家数軒——島村昭治さんとか、（熱田派の）小泉英政さんなど——が、91～94年の話し合いに参加することはとんだやぶ蛇になると受け止めてボイコットしました。熱田派はイニシアティブをとって話し合い・和解を進めましたが、北原派の農民たちは断固としてシンポジウムなどを忌避しました。とはいえ、事実として政府が強制収用を放棄したあと、闘い続けることを選びとった人たちはわずかでした。

—— 抵抗の代償

道場：リケットさんが初めて三里塚に足を踏み入れた1980年頃と、闘争初期の1968年、さらに『三里塚に生きる』に描かれた2014年の三里塚という3つの時点をつなぐお話をいただきました。おそらくきょう映画を見て、「三里塚」というものに初めて触れた方々もいらっしゃると思いますので、いまお話しされた背景から『三里塚に生きる』について感じたことをもう少しお話しいただけますか。
リケット：空港反対運動の当初、国の一方的なやり方に対して、用地内の貧しい農民もいれば、周りの「古村」などの豊かな農民たちも構いしましたが、多様な生き方や選択肢がある中で、多くの農民は当分の間、すべてを賭けて抵抗したわ

3) 山口、前掲、p. 236。

4) 平和的な解決に向けて、1979年に管制塔の占拠後、若い農家を中心に反対同盟数名が密かに政府と接触して、二期工事の凍結、強制収用の放棄を条件に和解の可能性を探りましたが、合意発表の前に新聞社に事前リークがあり、その結果、当事者によって「話し合い」は存在しなかったものとされて、この件はそれで終わってしまいました。その後、青年行動隊中心に農民主導の反対同盟を立て直そうとする熱田派と、従来の支援グループとの関係を重視する北原派とに分かれました。（青年行動隊によるビラ「たたかひの原点から、百姓の団結を考える」1982年9月参照）。

けですね。家族と生活、村、地域を守るといふ、広い意味での「命」を大切にしていこうという強い意志があったわけですが、それが国家の暴力に立ち向かい、衝突したときに、守ろうとしたものが内側から徐々に崩れていきました。映画のなかで、問題は「人が死んでも空港を作るんだ」という「人が死ぬような構造」を作った権力側にあると島さんが指摘しています。シンポジウムなどで主役を果たした石毛博道さんのイラスト集⁵⁾のなかに「権力の顔を見てしまった者たち」というような表現がありますが、その出会いは、ごく「ふつう」の農村の青年たちにとって言い知れないほど不幸な恐ろしいものでした。それで日本の民主主義が失ったものも大きかったと言えましょう。それというのは、三ノ宮さんの死に象徴されていると思います。「抵抗の代償」という映画の副題は、その内実を見事に表わしていると思いました。

代島：英語のタイトル（The Wages of Resistance）ですね。

リケット：そうですね。青年行動隊は農村の未来を担っていました。強制収用は、農家、農村の生存権を根こそぎにする、生死に関わる問題と見なされました。先述のように1971年2月の第1次代執行のときに青年たちは、空港公団が狙っていた土地の下に地下壕やトンネルを掘って、土の中に入り込んで体を張って抵抗しました。地下壕の中に人がいるにもかかわらず、国は容赦なく大型ショベルカーなどの重機でもってこれの一つ一つ、潰そうとしていくんですね。その時点でも、人間が死んでもおかしくはないし、死ななかつたのは不思議なことです。生きるか死ぬかという心境で、若い農民たちが9月の第二次強制収用を迎えました。そのなかで、やられる一方ではなく、今度は打って出ることを決心したと思います。結果的に激突で機動隊員が殺され、一人のおばあさんが強制的に立ち退かされ、三ノ宮さんも自死に追いやられました。支援者側にも大けがをした人が多く出ましたし、中には自殺した者もいました。

僕が三里塚に着いてからも、そうした権力と農民・支援者の間の憎悪と緊張感が延々と続いていました。その状況がようやく解けはじめたのは、1986年の東峰裁判の判決の後からでした。1991～94年の成田空港問題シンポジウム・円卓会議は、さまざまな思惑や心の傷を抱えた人びとが、社会問題としての三里塚に一区切りをつけるためでした。

そして、シンポジウム・円卓会議の後には、続々と、元反対派メンバーが用地内から、あるいは騒音地帯から——たとえば辺田部落は騒音地帯なので——移転していきました。実質的には、かつて反対運動の軸となった部分が崩れていきます。そしてシンポジウムに積極的に参加した青年行動隊の中からも、むしろ空港を完成しようという推進的な動きが顕著になります。『三里塚に生きる』は多様な人た

5) 石毛博道『三里塚—石毛博道イラスト集』東方堂、1977年、および『草矢射る—石毛博道 絵と俳句』平原社、2010年参照。

ちの思いを痛々しいほど丁寧に追って、過去と現在のズレを描き出しています。二人の声を紹介します。

一人は『三里塚の夏』にも登場する元婦人行動隊の椿たかさんです。今は移転していますが、闘争の激しかったころの旧辺田部落をふりかえりながら、農地の売買が当時行われていたかという質問に次のように答えます。

なかったからね。何でもかんでも [土地が] 自分のものと思ってるから。だから、みんな自分のものを放さないから反対が始まっただよね。いまは売るので、買うのだの、簡単な話だけどね。いまはしょうがないわ。いまと昔はグルッと変わっちゃった。

もう一人は用地内で 2001 年まで空港反対の闘いを続けた堀越昭平さんです。2 本目の滑走路を建設する空港の二期工事への反対と、その後の移転を決めた経緯について、ざっくばらんに話しています。ちなみに暫定平行滑走路は 2002 年に供用が開始されました。

いいとか悪いとか、意地の問題だけじゃねえ訳だよ。家族の問題を考えなかったら、やっぱり今度は俺も引け目を感じるようになるからよ。俺が動かなくや二期工事は動かなかったから。だから [移転を決めたとき、今が] チャンスだって言うわけ、俺の息子が。[後略]

(代島：堀越さんの家がどかなければ二期工事ができなかった訳だからね。)

そうだよ。[中略] こっそり県知事と。県知事を中に入れて、運輸大臣と話を決めた。

ここでは、柳川秀夫さんや用地内の小泉英政さん、島村さんのように、土地を手渡さず農業にこだわった農家と行き違いが生じます。だから古い仲間たちの関係はいっそう錯綜しています。その異なった立場にある人間が、同じ上映会に集まるということは、今だから可能なんだなということを痛感しています。

大津さん、代島さんは直感で、東峰十字路事件と三ノ宮さんの死に焦点を絞って映画を完成させました。その二つの出来事が残した深い傷をそっと探してみると、当事者たちとその家族にとって半ばタブー化し、抑圧してきた内面——トラウマの記憶——と今の心情を打ち明けることができたということは意義深いことです。映画には、今現在、違う人生選択をした者同士が、どこか深いところでは、まだ繋がっているようにも僕には見えます。気のせいなのでしょうが。

映画の登場人物の大半は男なんですが、三ノ宮さんのお母さん、元婦人行動隊の静枝さんは 1968 年の『三里塚の夏』と新作品とのつなぎ役を演じている印象を受けます。『三里塚に生きる』では、長男の死をふりかえって、それを理解する

ための手がかりを共有してくれます。静枝さんは2006年に移転した新宅で次のように語ります。

[文男は三人の死を] 苦しめたみたいだね。[中略] 自分では、それも苦しめて、かわいそうだったり、俺が死ねば公団も、考えも甘かったんだよ、公団もいくらかあれしてくれっかと、何ていうの……。やめるようなことはないと思うけど、そのくらいのことも考えた……。

(代島：自分が死ねば、やめるんじゃないかと。)

うん、いくらか……。それは私の考えだよ。

—— 憎しみの連鎖

リケット：三ノ宮静枝さんの言葉も重いです。しかし、ご自身も想定したように、4人が死んでも、国、空港公団は反省するどころか、反対運動にさらなる弾圧を加えて空港建設を強行していきます。1971年の東峰事件の直後、警察側は大量の逮捕・拘留・起訴によって青年行動隊の崩壊を図りました。そうしたなか、事件の4日後の9月20日に、武装した機動隊が、予定地内に住む大木よねおばあさん(63歳)の自宅と土地を剥ぎ取りました。稲の脱穀中のよねさんは、4、5人の機動隊に押さえ込まれ、楯に乗せられて外へ放り出されました。その後、作業員が家を解体したのです⁶⁾。三里塚で直接的に強制収用に遭った唯一の民家ですが、どう見ても復讐と見せしめでした。映画のなかで、その後によねさんの養子となった小泉英政さんは、おばあさんのことについてこう語っています。

おばあちゃんのことを好きになったっていうのは、ほんとうに貧しいながらも、七つの時から子守りに出されて、勉強もしないで、字も読めないで、そういう風に生きてきた一人のおばあちゃんが、普通のおばあちゃんが最後まで国に抵抗するという、そういう気持ちに惚れたわけ。

1977年5月に、4年前に空港のすぐそばの岩山部落に建てられた鉄塔(62メートル)が強制撤去された直後に、支援者の東山薫さん(27歳)は抗議行動で短距離から水平打ちされた機動隊の催涙ガス模擬弾に側頭部を直撃され、死にました。東山さんは、反対同盟の野戦病院でヘルメットなしで救援活動をしていました。その翌日、新左翼系の支援グループが警察官1人を火炎瓶で襲撃して殺しました。1978年3月に支援者20名が、開港直前の中央管制塔に突入して設備を破壊して空港の公開を遅らせましたが、その後でもう1人の支援者がまた死にまし

6) 伊佐千尋「三里塚で散った大木よねの歯ぎしり～余命長らぬ一人の老婆の眼に映った権力の素顔」『潮』1987年5月、p.336。

た。管制塔を占拠し、懲役刑を終了させた原勲さん（28歳）は1982年に釈放された数日後に自殺します。そういった「憎しみの連鎖」みたいなものをどう断ち切れればいいのか。結局、多くの農民の答えは、話し合いと和解の追求でした。

しかし、90年代前半のシンポジウム・円卓会議は熱田派にも分裂を引き起こしました。空港建設を推進するか、反対を続けるか、立場が分かれていって、僕も行ける家と行けない家、話のできる人とできない人ができてしまいました。その中で個人的に数名の友だちがそれぞれ違う選択をしました。一部はシンポジウムに積極的に参加して、それを機に謝罪も含めて国から取れるものを取ろうとするという立場にいました。もう一部は、これが国の策略だから畏にはまらないようにと距離をとって用地内で居座った人たちです。さらにその間に立って、双方をよく理解したうえでどうすればいいのかと真摯に思い悩んだ人もいます。福田克彦さんはこの立場でした。

僕も、和解成立の成果を認めつつも、国家・空港公団（2004年から空港会社）に一切頼らず、農業を続けることを決心した人たちにもシンパシーを持ちます。そこには三里塚の原点があるんじゃないかと。すでに和光大学に着任していたので、三里塚へ自由にいけなくなりましたが、遠くから見ている辛い時代でした。

—— この映画に出なかった人たち

道場：そういうところで、今のリケットさんのお話重ねて2つばかり私からも監督に質問いたします。1つはこの映画に登場する方々以外にも、たぶんたくさん取材を申し込まれたと思うんです。それで、なぜあの人やこの話が出てこないのか、といった疑問を抱く方もいらっしゃると思うんです。この点について。

それともう1つ、リケットさんから「憎しみの連鎖」ということが出されました。これは皆さん異口同音に語っておられましたし、それから柳川さんは「魂の問題」という形で言われています。この問題について監督からお話をいただきたいのですが、いかがでしょうか。

代島：はい。実は大津さんと2人で行って、大津さんが一番話を聞いてみたかった人たちは、青年行動隊の人たちでした。柳川さんや石毛さんや、島さん、小泉さん、そのほかにも大津さんが会ってみたい人たち。

僕は1958年生まれで、三里塚の闘争は同時代に体験していませんし、空港を開港したときに大学1年生ぐらいなんですね。ですので、僕はそういう人たちに会うのは初めてでした。ですから大津さんが会いたい人に僕も一緒に会いに行くという形で行ったんです。シンポジウム・円卓会議が終わって和解して移転した。それで辺田から移転した人たちの集落とか、立派な家が建ってる場所がいくつか、そういうところを訪ねて、移転した人は話してくれるだろうかなんていう話をしながら訪ねていきました。椿たかさん、三ノ宮静枝さん、萩原勇一さんがそうですね。

こういう人たちには、何を聞いたらいいのかもなかなかわかりませんでした。結構早い時期に話に行った堀越昭平さんは三里塚で有機農業、「微生物農法の会」をはじめた方で、その微生物農法の会の話になるともうとめどなくしゃべってくれるんですけども、彼が一番やっぱり悩み傷つき考えた時期のことっていうのは、なかなか触れられなかったんですね。

そういうのは、だんだん触れられるようになるんです。そのほかに、東峰でまだ自宅もあり農業をやってらっしゃる島村昭治さんのところにも何度も何度も訪ねました。この家は息子さんが農業を継いで、3代続けて農業をやり続けていくということで、テレビ局なんかも含めて取材の申し入れがかなり多い。現在の状況を象徴する存在になってるんですね。だから僕らの依頼を引き受けてしまうと、そういうのも引き受けざるを得なくなると。これが取材を断る最初の理由でした。あとは、今置かれている立場が微妙な時期だと。空港会社と取引をすとかいう意味ではなくて、自分たち家族がこれからどう生きていくかという、その展望をご自分なりに考えてる時期だった。この映画に出てしゃべることで、また波風が立つようなことは避けたいということでした。[もともとのB滑走路計画の真ん中にあり、いまの暫定B滑走路のすぐ南にある] 島村さんのお宅と畑は離着陸のいちばんいい画が撮れるところなんですけど、うちの家族を撮らなければいくら畑に入ってくれてもいいし、うちの2階から狙ってもいいよ、なんてところまで許してくれたんですが、でもやっぱりカメラの前で話をしてくれることはありませんでした。

そのほかにやっぱり東峰にいた方で、最近空港会社と話し合いをして、それでちょっと外に出ることによって、自分の農業の展望を開いていく方とか。空港会社とも話して取引をしたりとかしてる人もいましたから、そういう人のところに行くと、もう今さらほじくり返してくれるなどという人もいました。

今回10人の方がお話をしてくれてるんですけども、その2倍ぐらいの方には声をかけたと思います。その中でこの10人になりました。ただ、それぞれの生き方は十人十色です。関わった方、支援とかの方々も含めると百人百色、千人千色の三里塚闘争に関わった方の生き方があるんだなということ、この10人の方々の生き方から想像していただければいいかなと思います。

あとはその「憎しみの連鎖」の問題で言うと、僕が会いたかった人は、1980年代に『百姓物語』（晶文社、1989年）という本を書かれていた小泉さんです。その本の中で彼は「闘うという言葉を使うのをやめようと思う」と言っているのです。闘うという言葉でこれ以上愚かになることはもうやめたいと言うのです。闘うという言葉を生きてということであるので、これからはやっていきたいという内容の一篇の詩にまとめています。80年代後半にこういうことを考えて生きてきた。それから有機農業をいろいろ工夫されて、今は自然農法を実践する循環農場をやってらっしゃる。そういう生き方も含めて小泉さんに会ってみたいと思っていました。彼は小泉（大木）よねさんの養子になられたということも知ってい

ました。

そこで小泉さんに、大津さんと一緒に会いに行き、取材を申し込みました。最初はやっぱり小泉さんも1カ月ぐらい考えていました。自分が今、そういう立場になるのがいいのだろうか。彼は今まで映画にもテレビにもほとんど出たことがない人です。そういうところに出るのが嫌な人なんですね。今回彼が出てくれたのは、自分の思いを、特によねさんに対する思いをここで語っておきたいということがあったのだと思います。そのことは、よねさんの補償問題とか、彼が生きてるうちに決着をつけたいことがまだあったんですね。この映画の中でそういうことも語って、やっぱり自分はまだ抵抗をやめてないぞということを言いたかったのかなと思いました。

「憎しみの連鎖」ということで言うと、その小泉さんなんかは、もう80年代の後半からそういうのはやめようよということを言っていたんです。

—— 福田克彦と「共生」

代島：僕は今回映画をつくるにあたって、和光大学で講師もなさっていた福田克彦さんの『三里塚アンドソイル』（平原社、2001年）という分厚い本の言葉に刺激を受けました。彼はこれを書きかけたところで1998年の1月10日に脳幹出血で亡くなっています。この本の最後の仕上げの第10章を書いているところで、ワープロの前で倒れて亡くなりました。この『アンドソイル』が、僕にとっては大きな手掛かりになりました。1つは三ノ宮文男さんの遺書のことを、福田さんがこの本のプロローグで書いているんです。「辺田部落の三ノ宮文男が亡くなったこのできごとに寄り添わなかったら、私の20年は違ったものになっていたかもしれない」と書いています。それほど彼の死は関わったすべての人に重いものだったんだということがわかります。

あともう1つは、意識を失う直前まで向かっていたワープロの画面に残された原稿ですが、その中の言葉も僕をすごく刺激しました。要するにシンポジウム・円卓会議が終わって、それで地域と住民と空港と共生していこうよ、共にいい地域をつくっていこうということで、共生委員会とかができて、それで「共生」というのが円卓会議後のキーワードになってくるのですが、福田さんはそのシンポジウム・円卓会議にも関わって、その手伝いをしていたんですけども、その福田さんは、死の直前に「共生という言葉が地域を覆ったとき、本音が言えなくなったという事実がある。共生は呪縛と化しているのだ」と書いていたのです。共生というのは浄化されるという感覚があって、泥とか不条理というものが消されていってしまうというふうに書いています。共生というきれいな言葉で地域がぐるまれていって、それで今自分の思いを言うことができなくなっていく、呪縛されていくということを、福田さんは非常に悩んでおられた。

僕は今回、大津さんと撮影に入って、その泥とか不条理みたいなものを山のよ

うに見ることになりました。シンポジウム・円卓会議が終わったあとも、そういうものが渦巻いているのです。そういうものを隠してしまっているのか。今は共生で、みんなで成田空港と共にどうやって生きていくかだと。第3滑走路をつかって成田を盛り立てて、地域づくりをして行こうと。そういうところに隠されている泥とか不条理です。そういうものを、映画の中で人々の気持ちの中からどう描けるのかということが強いテーマになりました。

移転してしまった人たちも、やっぱりそういうものを抱えています。それから、柳川さんや小泉さんのようにいまだに農民的不服従というやり方で抵抗を貫いている人もいます。そういう姿を撮りたかったということがあります。

それと、この映画の冒頭に、聖書ヨハネ伝のエピグラフの1粒の麦というのをかけましたが、死と生が繰り返され、死と死のあいだに挟まれて我々が生きていく中で、死というものをどういうふうに分の中で種に変えていくかという、そういうこともこの映画の1つのテーマとしたかったんです。

1粒の麦のこのエピグラフは、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』のエピグラフでもあるのですけれども、やはり三里塚の闘いを生きてきた人たちから、もうちょっと普遍的な、人間が自分の心情というか、自由にこう生きたいということを曲げないで生きるというのはどういうことなのか、というドラマですね。そういうものが描ければ、かなり普遍的なものになるかなと考えました。

去年、台湾国際ドキュメンタリー映画祭に招待されまして、オープニングで上映されました。台湾では去年3月に学生が国会を占拠して、それで非暴力の運動をやりました。オープニングの上映のとき観客の半分ぐらいが大学生でした。三ノ宮文男の遺書が朗読されると、すすり泣きが聞こえてきました。上映が終わって質疑応答をするなかで、台湾の大学生による国会占拠事件は一般的に平和裏に終わって成功した出来事と捉えられてますけれども、実際は仲間割れがあったり、機動隊が入ってくるという情報で戦々恐々としたり、いろんなことがあったことがわかりました。だから22歳の文男さんがこういう思いで書いた遺書は、自分たちにとっても心に響いてきたと言うんですね。そういう意味では、彼ら自身が今、当事者なんです。質疑応答の中で、今日本の若者はこの映画にどういう関心を持ちますかと質問されたのですが、いやー日本はどうなりますかねえ。自分たちが思ったことで社会を変えていくということがとても大事なのですけれども、そういうことが起きづらいと答えました。今年の3月から4月に、今度は香港国際映画祭に招待されています。香港でも雨傘で闘って敗れた若者たちがどう見てくれるかということを楽しみにしています。違う国で、違う文化の人たちにも伝わる心情も描けたということは、台湾で嬉しかったことです。

—— 三里塚で出会った人たち

道場：若い人たちがどう見るかという重要なお話をいただきましたが、リケット

さんは上映会を企画したときどんなふうに見てもらいたいと考えたのか。また、いま監督からお話のあった小泉さんと「憎しみの連鎖」の問題に関してお話しただけですでしょうか。

リケット：僕は、「闘争」、「闘争」とくり返しながらも、実は三里塚で闘争を体験したことはありません。1980年に初めて現地を訪れた時には機動隊との激しい衝突は過去のことでした。当時、僕は36歳で、もう若いと言えず、青年行動隊のリーダーたちとそんなに違わない年齢だったんです。若い農民とその周囲の支援者——福田さんと波多野ゆき枝さんなどの「流民」というか、(僕流に言えば)「民主派」の人たち——と知り合って、その関係のなかで自分の考え方が変わりました。反権力闘争とか、市民的不服従とは自分なりに分かったつもりで、その枠組みで研究を進めようとしたのですが、それよりも、農村と農民の日常世界と思想(農民的価値観)の方が有意義なテーマだと気づきました。

農村は、保守的で排他的だと都会人によく言われます。しかし、反対運動の中では、村の境界線が曖昧になり、その閉鎖性も緩んで、農村共同体が多くの支援者を迎え入れました。そこで、若い農民たちと支援者たちが出会って、親密な人間関係を結びあったんです。農民的豊かさ、寛大さ、したたかさ、厳しさを味わいながら、知らないうちに、自分の人生も豊かになりました。その観点から現代の管理社会や、物質主義的な大量消費の世界の中にいる都会人の自分を見つめ直そうとしました。

ですから『三里塚に生きる』を観たときに、ややショックを受けながらも、新しい視点もあって新鮮に映りました。映画が突きつけるテーマは、国家と個人、暴力、市民の抵抗権、人間の尊厳、そして「農」という営みについて深く考えさせられるので、ぜひ和光の大学生にも観る機会を作りたいと思っていました。

——三里塚で学んだこと

リケット：三里塚の経験から、主義主張、大義名分に対する疑問を感じるようになりました。三里塚は、1970~80年代に地域闘争のメッカであって、さまざまな支援グループがそこに集まりました。革命を目指す新左翼系の人、住民運動に立つ人、各地の基地問題を抱えている人、労働組合系の人、キリスト教団体の人、市民社会の民主化をめざす「ノンセクト」の人、コミュニン的な共同生活を重視する人も、現地に出入りして団結小屋を立てたりもしました。数少ないですが農業に専念した小泉さんのように非暴力思想を大事にしている人もいました。

新左翼系党派グループのなかで、一群の人びとが、三里塚を反権力の「聖地」とか、「砦」としか見ておらず、現地では二重の権力構造を作ろうとしていました。しかし、そうすることで、組織としての権力とか、男としての権力など、自らの心に宿る権力志向が見えなくなるんですね。となると、どんな立派な活動をして、結局、自分のためにも人のためにもなりません。そんな単純なことに気づい

てそれまでの自分の言動についても深く反省させられました。

三里塚を通じて外の社会への視野も広げられました。用地内農家には冬場に出稼ぎに行く人たちが東京の山谷とか、日雇い労働者の寄せ場で、深い交流を持っていました。あるいは被差別部落問題で活躍している人たちも三里塚で援農しながら農民と語り合っていました。僕は、援農先の東峰部落の島村昭治さんの自宅で、お父さんの良助さんの紹介で野宿労働者と部落解放同盟の活動家に出会うことが時々ありました。

また、農村は家父長的な性格が顕著で、三里塚は「男の運動」とよく言われていました。確かに女性は自分を犠牲にすることを強いられた場面が多かったと思います。支援者側にも同じことが言えるでしょう。

一方、長い闘いの成果の一つとして、支援者のなかには、農家の人たちと結婚した女性も少なくありませんでした。農家の「嫁」となった彼女たちは三里塚の有機農業運動で重要な役割を果たして農村社会に活気をもたらしました。

僕は、福田さんと波多野さんが企画した勉強会で、青年行動隊のメンバーと支援者と一緒にフェミニズム・ジェンダー、少女マンガなどの議論に参加した覚えがあります。

そこで、1990年代初頭に同僚となった井上輝子さんのお名前を初めて耳にしました。支援者のなかに、セクシャル・マイノリティの知り合いもいて、彼らの話をよく聞きました。ちなみに和光の授業で時々上映するドキュメンタリー『ハーヴェイ・ミルク』を初めて知ったのも、三里塚のおかげでした。

原発問題についても、1980年に三里塚で、当時、和光大学の教員だった生越忠さんから初めて詳しい話を聞きました。81年、82年に青年行動隊数名と支援者とともに国内だけではなく、フランスでの立地住民の反原発運動との交流にも参加できました。その意味で、三里塚は自由度の高い貴重な学びの場でした。

僕は小泉さんとお連れ合いの美代さんから、大きな感銘を受けました。

小泉さんは、北海道の小作農民の家に生まれて、東京に出てくるんですが、日雇いの仕事、特に鳶をやっていました。三里塚に入る前はベトナム反戦運動にわり、鶴見俊輔さんに会ってその影響を受けました。アメリカ大使館前とか、非暴力不服従の座り込み行動などに関わっていきます。

小泉さんは、三里塚に強い関心を持って、美代さんと一緒に強制収用された小泉よねさんの養子となり、国に頼らない生き方を一貫してきました。先ほど代島さんからご紹介があったように、「闘争」という言葉は使わなくなったけれど、三里塚で農業をやり続けている限り、負けてはいないという自信と誇りを持っています。およそ20年前から産地直送の循環農場を営んでおり、「憎しみの連鎖」を、徹底した有機栽培（非暴力農業）で断ち続けています。

代執行後のよねさんの面倒を見たわけですが、その後、国と公団を相手取って謝罪と補償を要求し続けてきました。2001年になって、国は、「必要なかったの

に強制的な手段を使った」という主張に対して正式に謝罪して、2002年に用地内にあるおばあさんの畑が返還されました。しかし、千葉県は、詫びもせず、補償金の支払いも放置しました。小泉夫婦は二人きりになって、孤独な闘いで千葉県と空港会社と長い交渉をへて、43年経った今年の2月にやっと、県も謝罪と和解という形で、よねおばあさんの人格権・生活権も含めて補償問題を解決することに合意しました。国・県・空港会社は補償が長く放置されたことは「重大な人権侵害である」ことを認めました。補償額が決まったら、小泉さんたちは沖縄の基地反対運動や福島の大震災支援などに寄付する予定だそうです⁷⁾。

——『三里塚に生きる』の作品世界

道場：ちょっとだけ補足しておきますと、大木よねさん、戸籍名小泉よねさん宅の強制収用というのは、収用がおこなわれた当日に千葉県知事が今日はやらないというふうにメディアに発表していたにもかかわらず、知事のもとにある千葉県警の機動隊が続々とやってきて、人が住んでいる家をその場で取り壊して、本人を無一物で放り出すという、そういうことをやった強制収用です。当然、これはだまし討ちであるという怒りを生んで、その日のうちに作業員の宿舎が焼き討ちされるというような事件が起きています。県知事がここで謝罪したことは、このよねさんの問題にとって非常に重要な意味をもっています。

僕は司会ですが二言だけ、この映画について語りたいことがあります。

一つには、「古村」の辺田というのは、全戸移転して、今は家のあった土台が残っているだけの、ある種の幻想的な風景になってしまっています。小川プロの『三里塚・辺田部落』の最初のところで——まだ辺田が村として生きていた頃——「トノジタ」という屋号のおじいさん、龍崎喜蔵さんが一軒ずつ屋号で呼びながら村の家々を数えていくシーンがあります。今回は、団結小屋の山崎さんのシーンのあと、なくなってしまった家を今度は「ゴロベエ」こと萩原勇一さんが同じような様子で確認するシーンがあります。途中萩原さん自身の若き日の映像も挿入されるこのシーンは『三里塚・辺田部落』へのオマージュであるとともに、いまや「古村」の死を確認するシーンでもあります。福田さんが「古村」の死を見つめながら、『三里塚アンドソイル』を書いていたころは、まだ辺田は生きてその

7) 小泉さんいわく「[三里塚の] 現地では今でも強権手段が取られている。よねさんの問題では謝罪を重ねているが、体質が根本的に変わったわけではない」。

成田空港問題は終わっていません。90年代前半のシンポジウム・円卓会議の結果として、政府、県、空港会社は強制的な手段を断念し、地元住民と相談してその理解をえた上で民主主義的な手続きをふまえた空港運用を行なう、と公約しました。ですが、その後、地元の生活者の理解をえられなかったにもかかわらず、お金と力だけのゴリ押しで2002年に第2の（平行）滑走路を共用し、2009年にその延長をして今現在、2020年の東京オリンピックに向けて第3の滑走路計画で空港の拡張を計っています。民家上空の40メートルをジェット機が飛び、騒音がいやなら、移転しなさい、という今日的な立ち退きの仕方です。

場にありましたが、さらに15年以上が過ぎ、そこには人が住まなくなっていて、「死んだ子の年を数える」ということばのように、死んだ村の家を数えるシーンであったと思いました。『三里塚・辺田部落』から40年の時間が流れています。

それからもう一つ、この映画で一番印象深いのは、秋葉清春さんです。闘争に関わった人たちの立場が分かれていった中で、それを結びつけているものがあると監督も言われましたが、その役割を秋葉さんがこの作品の中で引き受けておられます。

文男さんが亡くなったその日のことを、みんなが異口同音に語りながら、ちょっと本当に衝撃的ですけども、清春さんが、「瓜生正彦が“あー、あー”と言った」と言う。すぐそのあとに石毛さんが、「“あー、あー”と正彦が言った」っていうふうにつなぐ。まさに、これは事実としか言えないリアリティを持ってシーンが展開されています。そのあと1回、他の方へ話が進んだあと、再び清春さんに戻ってきたときに、文男さんが亡くなったということを、柳川さんと石毛さんがすごく受け止めて耐えている、2人は偉いと思うというふうな発言をされていて、彼は先に移転してしまったことでもあります。2人への気遣いをすごくしている。移転したことで家を焼かれた経験も含めて、非常に冷静に受け止める一方で、文男さんの死に関して、自分があるとき止めていれば、という気持ちがある。そのことを語りながら、自分は耐えられなかったけど、ヤナと石毛はちゃんとそれに耐えているという形の気遣いをしています。今この2人が別々の立場を選択しているということは映画の中では明示されていませんが、清春さんの発言が「あの日・あの場所」にそれぞれの人たちを再びつなぎとめていきます。それがこの作品を本当に支える一言であるように感じました。

——「いま」を描くということ

道場:この上映会をするということで石毛さんからメッセージをいただきました。この作品ですべてのことを取り上げることはできないと監督は言われましたが、今の生きざまが描かれている人もいれば、石毛さんのように三ノ宮さんが亡くなった日の語り部として登場するのみで、今の生き方が見えない人もいます。その後には、シンポジウム・円卓会議の意義を高く評価し、そこで闘争を終えていった人たちと、さらに闘争を続けていった人たちとの違いがあるように思います。石毛さんのメッセージは、自分たちの選択や生き方が表現されなかったのは残念である、ということでした。その点について監督のお考えをお聞かせください。
代島:三里塚での試写会するとき、石毛さんはやっぱりシンポジウム・円卓会議のところまで描かないと、三里塚がどうなったのかを描いたことにはならないとおっしゃっていました。僕もそれは聞いてます。

最近、『水俣の啓示』（色川大吉編、上下巻、筑摩書房、1983年）という本を読み直していました。「不知火海学術調査団」による調査の記録です。この近代文明に対

して水俣が啓示するものがある、というのがこの本のとらえ方だろうと思います。

では、三里塚の啓示とは何だろうと考えたとき、シンポジウム・円卓会議が三里塚の啓示かという、僕はそうではないと思ったんです。シンポジウム・円卓会議は、こういう経緯でこうなったんだということはありますけれども、僕は、三里塚の啓示というのは闘った農民たちの心情だと思ったんですね。それから、闘いの中で傷つき、悩み、悲しみのどん底までいった人たちがどう生きてるか、ということこそが三里塚の啓示ではないか。たとえば、今、沖縄の辺野古で闘いが続いているし、福島であれば汚染した土をどこにもっていくかをめぐって闘争が起きていたり、いろいろありますよね。そういうところで、何が啓示になるのか。とくに、「市民的不服従」ということで何が言うなら、それはシンポジウム・円卓会議ではなくて、闘争が始まって東峰十字路で3人の警官が死に、文男が死に、国の側の人々が死んで反対同盟の側も人が死んで、にっちもさっちもいなくなって泥沼になっていくという、そういうことになってしまうんだぞと、人間が殺し屋になっていくような闘争は間違っていると、そういうことが三里塚の啓示だと思うんです。

僕はこの映画でそこを描きたかった。シンポジウム・円卓会議みたいな政治的な駆け引きで終わっていく、和解していく、そういうことも後世に残すべき一つのマニュアルかもしれませんが、マニュアルを映画にするつもりは全くなかったんです。そのことは自分の中ではっきりしていました。

それからもう一つ、90年代のシンポジウム・円卓会議を描くとしたら、「共生」



映画「三里塚に生きる」より ©三里塚に生きる製作委員会

という言葉で隠されてしまう泥とか不条理を描き出さなければ、一つの映画にはならないと思います。それを描くまでには今回は至りませんでした。

—— 会場から

道場：会場からも発言をいただきたいと思います。大津幸四郎さんの娘さんで、また和光大学のOGでいらっしゃる大津智美さんがいらしています。一言お願いできませんでしょうか。

大津：私は学籍番号が59Lですので、和光大学に入学したのはもう31年前になります。空港でいうと二期工事が問題になっているところですね。和光はその頃もまだ学生運動が盛んでしたので、大学内は「成田空港反対」のような立て看でいっぱいでした。ですから私たちはたぶん同年代の方たちより多少知識は多かったと思います。

今回、父が久しぶりに成田のほうに行きましたのは、もともとは『三里塚の夏』のブックレット（鈴木一誌編『小川プロダクション「三里塚の夏」を観る——映画から読み解く成田闘争』太田出版、2012年）の監修を頼まれたということで、久しぶりに行ってみたということなんです。それで始まったのですが、歳も歳でしたし、ちょっとたいへんで、とりあえず頑張りましたが、今年の11月の末に亡くなりました。

確かに、三里塚ってずいぶん昔の話ですね。もう終わったことと思ってる方も多いと思います。三里塚だけでなく、福島ももうある程度のところで終わったというふうにとらえていらっしゃる方も多いです。「もう帰れるようになったんだからいいじゃないか」とか。でもそういう問題ではありませんし、戦争の問題も「戦後70年」で「もう終わったこと」として片づけようとしていますけれども、これもまだまだ当事者の方もいらっしゃいますし、終わってないことです。でもみんな終わったことにして、見ないようにして通り過ぎてしまう。

三里塚で闘っていた方たちも、皆さんふつうの私たちと同じ方たちですし、私たち自身も、何かのときにそういうふうな形で闘っていくこともあるかもしれません。「不服従」なんていうこと聞かない悪い人みたいに聞こえますけども、やっぱりおかしいと思ったことは、不服従でいきたいと私も思っています。父も非常に自由に生きて人でした。今こういうことを開催していただける大学はだんだん少なくなっていると思います。和光大学には自分で考えるということを大事にしてほしいなと思います。

道場：ありがとうございます。続きまして、先ほども『三里塚アンドソイル』の話でお名前が出ました福田克彦さんのお連れ合いであった波多野ゆき枝さんに一言お願いいたします。

波多野：こんにちは。波多野と申します。成田からまいりました。福田克彦が死んでから15～16年になりますので、昔のことも思えますが、こうやっ

て皆さんとお会いできて、今日も『アンドソイル』の本を見せていただきますと、そうです、一緒にやってきたという感じです。

それからリケットさんとは、ちょうど私が30のときに、福田と結婚するときにお会いしました。そしたら、実はそのもっと前から、私の友人とリケットさんは友人であつたりとかいうことで、長々のご縁が続きまして、今日はどうしてもお祝いというか、けじめなので、うかがいたいと思ってまいりました。

それから、石毛さんとは、今も資料収集の仕事を一緒にやっております。彼は、非常に複雑な人間で、シンプルな人間で、どちらもあります。彼は、大工さんなんですけど、最初にイラストを描いたんですね。そのイラストを見てみますと、みんな文男さんのことです。それから、イラストを描き続けているうちに、もう描けなくなったときに、細密画を描きました。三里塚の風景でした。それから俳句をつくるようになりました。五七五の短い文字です。その中で、やはり三ノ宮文男さんの俳句をつくりました。今日は、1本だけ思い出しましたので、ご披露させていただきます。

なく村や 首の縄締む 秋の雨

これだけなんですけど、やはりあの日のことを忘れられない石毛さんがいらっしゃるのです。この映画でもう少し石毛さんの生き様の声がかかれたら、私は嬉しかったなと思います。シンポ・円卓を描けとは言いません。石毛さんをもう少し描いてほしかった。たった一言でも、いま石毛さんがどう生きているのかが、テロップでもいいから流れたら、石毛さんは救われたのではないかと。石毛さんは、屁理屈しか言えないので、「シンポ・円卓をなぜ入れなかった」と言っていますが、彼はそういう人間ではないのです。

あの映画の中で昔が描かれていないのは、山崎さんと石毛さんかなと思います。昔の声があつて今の声があるというふうに、萩原さんとか小泉さんにしても、皆さん、おじいさんになった姿が描かれておりますが、石毛さんは昔がない。彼は昔はやんちゃな子でした。私が30のときに会った同級生。同い年の石毛さんは、本当にガキンチョの青年だったんですね。そういうかわいらしいところが、今もおじいさんの中にありますので、少しそこら辺がとっつけられたら、とてもいい世界があつたのではないかとというのが、私の希望です。ありがとうございます。

道場：ありがとうございます。和光大学のOBの方で、第1次代執行にも参加されたという山田さんが今日いらしているとうかがいましたが、一言いただけますでしょうか。

山田：私は和光の2期生でした。和光にはそのころ三闘連、三里塚闘争連合というのがあつて、そのあとに三三共闘（三大学三里塚共闘）と言って、この地区でやっぱり三里塚を支援する会がありました。

70年から私は現闘（現地闘争員）に入って援農したりするんですけども、71

年の7月26日に、東峰十字路の前にパクられて（拘置所の）中に入ってしまった。ですから東峰十字路のことは中でしか知らないんですけども、その中に、和光のやっぱりノンセクトの仲間で、同じようにパクられた人間の中で、やっぱり三ノ宮さんと同じように自殺しちゃった人間がいるんですよ。……そういう意味では、私は支援の人間でしたけど、少しでも農民と同じ気持ちで、そんなのはずっとわからなかったけれど、ただ、正しいことをやってるのに、それを精神まで曲げられるのは許せないと思ってました。みんなどういう形であれ、いろんなふうに分かれていっただろうけども、闘い続ける以外ないんじゃないか。そういうふうに思います。

道場：ありがとうございます。あともう一人、映画の冒頭に登場する山崎宏さんがお見えになってますので、お話しいただけますか。

山崎：山崎です。いまだに、「三里塚現闘」という肩書で、現地に住みついて、柳川さんたちと一緒にやっています。

映画を見た感想ですけども。映画にして撮ってくれて本当にありがとう。この一言に尽きます。ほとんど世間的には、三里塚闘争はもう過去のものという常識というか、そういう風潮になってると思います。でも、現在も実際に闘ってるわけですね。小泉さんは、「闘い」という言葉をやめたらしいけど、やっぱり闘いは続いています。現時点でも、反対同盟は、毎年1月には旗開きをやっていますし、それから毎年春と秋には、首都圏を中心にして、支援の現地集会をやっています。

なぜ現地集会をやらなければいけないかというと、闘う課題があるからです。昔の空港公団が、今は、空港会社になっていますけれども、次々と空港の拡大を実際に行なっています。用地内にある反対派の土地を、今は強制代執行できないので裁判という形で取り上げています。今は、いわゆる熱田派と北原派と2つあるんですが、それぞれ、裁判を抱えています。熱田派の場合は、旧来の現闘本部の建物を全く空港敷地内に囲い込んでしまって、それが老朽化したことをもって撤去せよという裁判を空港会社が千葉地裁に起こしています。北原派においても、やはり農民が親子2代にわたって耕作してきた畑を裁判を通じて取り上げようとしています。さらに、第3滑走路計画が出てきたり、LCCの参入をさらに拡大するために、夜間飛行時間緩和を図っています。このように、三里塚にとっては、一貫して闘わなければいけない条件が絶えたことはありません。そのことを強く訴えたいと思います。

—— 最後に一言

道場：ありがとうございます。予定した時間を過ぎていますので、最後に登壇者のお二人に一言ずつお願いします。

代島：どうも今日はありがとうございます。この映画をつくるにあたって、い

ちばん最初に三里塚の今を案内してくれたのが、波多野ゆき枝さんであり、石毛博道さんでした。

というのは、今、これを伝えたいという思いを強く持つてる人たちなんですね。ですので、波多野さんから「石毛さんの心情をもうちよっと描ききれなかったのか」という一言がありましたけれども、それは、いろいろと編集で努力をしてみたんですが、結局そこまで踏み込めなかった。島さんが政府と和解交渉をして決裂したみたいなどころまで歴史はさかのぼるんですけども、また現在の移転した人たちのところを訪ねて行ってるんですが、なかなかそのあとというところまで行けなかった。だから、波多野さんがおっしゃるように、そこが弱いのかもしれないという感じはしますけれども、でも、その歴史を描くことよりは、心情を描きたかったのだ。

この映画の全体の構成というのは、別に時間軸に沿って進行する筋とか主人公とか、ではなくて、なおかつナレーションもないので、説明不足のところもあります。こういうパンフレットをつくりました。このパンフレットにはこの映画のシナリオが完全採録されておりまして、劇映画のシナリオのように読めるようになっています。そのほかにも、島寛征さんと大津さんとの対談などが入っておりますので、この映画の補足として手掛かりになると思います。今日は、ありがとうございました。

リケット：代島さん、今日は本当にありがとうございました。この映画のおかげで三里塚をもう一度考える勇気が湧いてきました。改めて感謝の意を表わしたいと思います。

柳川さんの視点ですけれども、最後に一言だけ。「農民」と「支援」との間に固い一線が引かれているように見えますが、その境界線はもしかしてもっと曖昧で緩いものだったかもしれないとあらためて思いました。いろんな人間が、それぞれの考えと希望をもって三里塚に心を寄せ、自らの生き方を確かめながら、社会の民主化を進めていこうとか、乱開発と権力の濫用の被害者の視点に立って歪んだ政治体制を立て直すとか、さまざまな動機がせめぎあう中で、現地で意外な出会いと体験を得て学んできました。映画のなかで、「その人たちの思いも大事だ」と、柳川さんが言っているのは重要だと思います。

結局、柳川さんが言う「魂の問題」の解決は、「農民」「支援者」を問わずに、個々の人が、悲しみ、辛さ、憎しみも含めてその体験から何を学び、それを今後の人生にどのように生かしていくかというところにあるんじゃないかと思いました。

道場：ありがとうございました。(拍手)

学生スタッフの考察

——「市民的不服従と現代」Ⅰ・Ⅱに関わって

菅野詠子 現代人間学部学生

指紋押捺拒否や三里塚闘争が行われていた時私はまだ生まれていませんし、和光大学に入ってから最近になって知ったため、「市民的不服従と現代」Ⅰ・Ⅱに参加する以前は私はこの歴史に対し距離感があったように思います。しかし、参加し様々な方のお話と映像資料を視聴し、この歴史が現在の私たちに強く関わっていることを改めて痛感しました。

「市民的不服従と現代」Ⅰでは映画『指紋押捺拒否』ダイジェスト版で映し出されている在日韓国・朝鮮人の人々の魂の叫びは30年間放置されてきた指紋押捺制度による葛藤と当時渦巻いていた差別への苦しみが見受けられ、私には到底想像できない程の重圧だったのだと思いました。また、デモの様子からうかがえる人々の思いは熱く並々ならぬ力強さを感じました。現在では「慰安婦」などの歴史認識問題や在特会の問題がありますが、映像から伝わる在日韓国・朝鮮人の人々への差別は現在もまだ変わらず色濃く残っていると思います。私は在特会のデモの様子を見たことがあります、警察に保護されながら「朝鮮学校閉鎖」の訴えとヘイトスピーチを行い、カウンターと呼ばれる人々がヘイトスピーチに対して必死に言葉で抵抗している様子でした。カウンターの人々の多くは日本人であり（あくまで見た目ですが）在日韓国・朝鮮人の人々はごくわずかなようでした。

当時の指紋押捺拒否運動の様子は在日韓国・朝鮮人の方々は胸を張って権利を主張している様子がありましたが、現在のカウンターの様子を見る限り少ないように思います。それは、在特会のヘイトクライムにまで及ぶ行為が、彼らに恐怖を与え権利を主張しにくい状況に追い込んでいるのだと思います。当時よりも一層周囲の人々にその問題性を訴え伝える事が困難である状況なのではないかと思いました。また、在特会のデモの様子は在特会を警察側が保護しているので、カウンター側が変に目立ち勘違いされる状況もうありうるため、在日韓国・朝鮮人を取り巻く問題の状況が見えにくくなっているのも現状だと思います。そのため、今回の企画の問いにもある「共生」という言葉の重みや難しさを痛感しました。しかし、リケット先生が最後に「拒絶する」と言われた言葉は今後も「共生」を考え目指す上で必要なキーワードであり、今回の指紋押捺拒否運動という原点に立ち帰る意義は大きいと感じました。

「市民的不服従と現代」Ⅱで視聴した映画『三里塚に生きる』の中で、成田空港が建設され日々飛行機が飛び交う今でも、その空を背にして黙々と農業を営み生計をたてる三里塚に残った人々の様子が一番印象的でした。青い空の下、当時の闘争と今についてインタビューを受けている、その表情には一言では言い表せない複雑な心の中が見え隠れしているように思えます。その様子から「三里塚闘争」を忘れず個人個人の中で、様々な思いを抱えながら三里塚を出ていった人々も含め、今も皆さんが三里塚に生き、戦い続けているのだと思いました。自分たちが生きてきた生活圏が大木よねさんの自宅と田畑を強制収用されたように国家という大きな権力に脅かされ、それでもただ自分の住む故郷を奪われまいと戦う姿は「生きる力」そのものに見えました。また、人々の機動隊と衝突し叫ぶ様子は国家の一方的な空港建設による人権侵害への途方もない怒りであると思いました。当時の「三里塚闘争」を観て思うのは、この成田空港建設問題と原発問題がリンクする点です。

一つは、国家の一方的な建設決定による三里塚闘争、国策に基づく原発誘致という国家権力の繋がりがある点です。原発誘致がきた地域は三里塚のように原発誘致を受けてもそうでなくても、そこに住む人々は賛成と反対で分かれます。賛成か反対かは個人が自分や地域の幸せを考えた結果がほとんどだと思いますが、その地域全体で考えるとやはり反対か賛成かで分かれるのは複雑な思いです。三里塚に残った人も移転した人も同様だと思います。

二つ目は、三里塚や国家以外の人々、つまり私たちの意識にも問題があるのではないかと思います。私は東日本大震災が起こるまで原発の存在をほとんど知りませんでしたし、電気がどのように作られ供給されるのかも考えたことが無かったです。成田空港も同様で成田空港を何度も利用しているのに、成田空港がどのような過程を経て今の空港に到るのか、どうして完成されていない部分があるのか、私が和光大学に入らなければ知ることも考える事もなかったと思います。東日本大震災で原発問題が広く知れわたり、私たちが電気を得る代わりに誰が犠牲になってしまったのか突きつけられました。問題なのは指紋押捺拒否によってみせる国家の顔を知っておくことや知らず知らず、もしくは知っていても知らない顔をしてしまうことだと思います。

当時の「三里塚闘争」の映像を観ると自分が間接的にでも関わっているのだという事実、国家という強い権力の存在が今もなお変わらずあり、普段見ている日本とは別の日本が見えてきます。そして、彼らの闘争がフィールドワークで見た原発の反対運動と重なり、責任のようなものを感じます。この「三里塚闘争」は私にとって時折忘れてしまう見えづらい社会・国家の現実と「生きる」とは何かを教えてもらえる作品のように思います。

「市民的不服従と現代」Ⅰ・Ⅱに参加する以前は指紋押捺拒否や三里塚闘争について少し知っているという程度の認識しかありませんでした。この企画に参加し、

一つの歴史を学ぶと共に、歴史に関わった一人一人の記憶・人生を目の当たりにし、また参加した複数人の問題に関わっている人々の思いや空気を会場で感じ、歴史の先にある深い部分に触れることができたように思います。また、関わってきた個人と向き合うことで歴史のとらえ方が変わってくることや個人にフォーカスし歴史について考えることの大切さを学ぶことができました。

——「権力的なものへの想像力」と「距離」

—シンポジウムを終えての実感

瀧 大知 和光大学大学院

今回のシンポジウムは現在の日本社会への憂いが形になったものであり、かつて闘った人々の運動を通して、もう一度、我々はどのように「市民的不服従」「共生」を取り戻すのか？ という命題が突き付けられたのだと感じた。

特に第1回目の「指紋押捺拒否闘争」は、その当事者の生の声を聞いたことに強い衝撃を受けた。日本の差別的な管理政策、踏みにじられる尊厳、登壇されたパネリストの方々、そして客席から発言された当時の運動参加者の冷静でありつつ「叫び」にも似たエピソードや意見は「権力」によって蹂躪される生命の問題を浮き彫りにしたように思う。

会場の迫力を目の当たりにしながら、自分はどこかで登壇者の方々や当時の運動に参加をしていた人々との「距離」を感じずにはいらなかった。

会場で考えたことはその感じてしまった「距離」についてであった。あの空間で感じた「距離」とは一体何なのだろうか？ それはおそらく、テーマである「市民的不服従」と関わる「権力的なものへの想像力」である。同じ空間を共有しつつも、「市民的不服従」と対になる国家を始めとした「権力」というものに対して、登壇者や運動参加者の方々が明確にピントが合っているのに対して、自分の中ではどうしてもぼやけてしまう（だからこそ、「権力的」という表現になってしまう）。

そのように感じたのは自分が日本国籍で本土在住、男、中流（意識を持てる）というポジションがあるからだということは間違いない。しかし、「指紋押捺拒否闘争」当時も多くの「日本人」が参加し明確な「権力」と対峙し外国籍の人々と共に戦い「共生」の道を探っていた。

では、当時の運動に参加していた人々が差別や植民地主義等の問題として認知していたかと言えば推測だが、そうした「他者性」における認知以上に「当事者性」における実感からの行動であったのではないか。

その「当事者性」とは、抑圧によって誰しもが尊厳を蹂躪されるという実感であり、その下では人びとの差異以上にお互いが「権力」と対峙させられてしまう「市民」として「共生」できたのではないか？ だからこそ「三里塚闘争」と「指紋押捺拒否闘争」がポジショナリティに過度に言及する必要がなくとも、一貫性を持って連続のシンポジウムが開催できたのだと考える。

「権力的なものへの想像力」はいつのころからか、大きな変質を遂げたように思う。現在は対峙する対象というよりも、自分たちを安全に護ってくれるものとして想像されているのではないか？

漠然とした不安意識は増加しているように見える。不安感が高まれば、セキュリティ意識が強まる。こうした中で「権力」による監視や管理は、自分達の「安全」を護ってくれるものに転化される。これが現在の日本社会を覆う「権力的なものへの想像力」ではないか？ 批判よりも積極的に導入されるようになった監視カメラの状況を見ると分かりやすい。

こうした「権力的なものへの想像力」という転倒こそが自分が会場で感じて「しまった」「距離」の理由なのではないか？ それは実態の変化を意味しない。あくまで立場や空間的な「距離」であり、「権力」との闘いはヘイト・スピーチの路上、沖縄や福島で実際に起きている。

エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ¹⁾は、「みずから隷従し喉を抉らせているのも、隷従か自由かを選択する権利をもちながら、自由を放棄しあえて軛につながれているのも、みずからの悲惨な境遇を受け入れるどころか、進んでそれを求めているのも、みな民衆自身なのである」(p18) と言う。

投票率は年々減少し、政治への興味関心は薄れていくように見える今の日本社会はまさに「自発的隷従社会」と言えよう。こうした状況に対して巷では変化しない政治に対する閉塞感等から人びとの失望感や諦めが高まり、希望を失っているのではないか？ という論評が聞こえる。

しかし自分たちは失望感を感じ、興味を持ちたくなくてもそこから逃れられない人びとがいることを考えなければならない。差別や排除、抑圧にあっていない人びとは逃げたくても逃げるのができない。

安全なポジションにいる人間がすることとは何か？ それは社会にある不正義、不公正を見逃さずに声を挙げていくことであろう。

ラ・ボエシは言う。圧制者に「なにも与えず、まったく従うことをしなければ、戦わずとも、攻めかからずとも、彼らは裸同然、敗北したも同然であり、もはや無にひとしいものとなる、あたかも、根に水分や養分を与えなければ、枝が枯れて死んでしまうようなものだ」(p20) と。特権者はけして持っているその力を売り飛ばし、さらなる差別や排除、抑圧に荷担してはならない。社会を変える責任

1) エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ、山上浩嗣訳『自発的隷従論』筑摩書房、2013年。

は声を挙げる力を持つ人びとにより大きく発生する。そのポジションから逃れたければ、この特権という力でもって不条理な社会を変化させる必要がある。シンポジウムで感じた「距離」を埋めることは容易ではない。だからこそ自分たちはその「距離」を直視する必要がある、勝手に社会を諦めることは許されない。数少ない希望を紡ぎだす責任が我々にはあるはずだ。シンポジウムという場は、その場から発せられたメッセージに自分がいかに応答していくかという、大きな課題を与えてもらったのではないかと勝手ながら感じている。